

私のスケッチ

美術部 久場 貫夫



小学生の頃から展覧会の絵を観たり、自分で描くのが好きだった。

3、4年生の頃は雑誌に載っている、東映時代劇役者の似顔絵を、ノート裏に描いて学校で友達に見せていた。

5,6年生になると先生に勧められて、地元新聞社主催の写生会に進んで参加していた。

地域の他の学校からも生徒たちが集まって来て、各自が好きな場所を描いて提出する。

審査員が選別して優秀な作品は、生徒名を紙上に発表していた。

中学生以上になると好みの部に入って活動するが、私は美術部に入ることは無かった。

部には入らないが、どこか遠くに行く時は、小さなスケッチ帳を持って行き、好きな場所を見つけて写生してくる、それを部屋の壁に張って眺めているのが好きだった。

会社に入ってもその癖は変わらず、旅に出る時はスケッチ帳と絵具を持って出る。

だいたい描きたい風景が見つからず、何も描かないで帰るのが殆んどであるが、たまたま好みの場所を見つけたら喜んでスケッチしていた。

絵の好きな者のサークルに入ったのは、退職して地域で動き出してからです。

仲間同士に聞いてみると、みんなスケッチをして、自分の技量を高めて絵のテーマを捜しているようである。

現在は市の美術協会と版画のサークルに所属している。

これらの会の発表展と市の文化祭や公募展に出したら、年に5,6点になる、同じ展に前出した作品は出せないが、別の展に順繰りにまわしている。

古いスケッチ帳の中から4点を選んで紹介します。

記載の作成年は50年近くに及ぶが、絵のレベルは今とあまり変わらないのが気になるところです。

[スケッチ作品の紹介]

1. 北の岬 (1968 年作)



学生の頃住んでいた室蘭市の中心部
測量山から海に落ちこむ断崖と海の色が気に入ってよく描きに通っていた。

2. 長崎の港 (1969 年作)



入社した年
職場の先輩について長崎の特約店を訪問していた頃、宿の裏の山手に登って造船所の方向を描いた。

3. ハーグ郊外 (1982 年作)



ハーグのホテル(バルニア)の部屋から見えた風景
冬枯れた林が拡がりその向こうに市内の建物が霞んでいた。

4. 教会の朝 (2005 年作)



ポルトガルの首都リスボンの教会を訪問した折、
窓から教会の屋根が見えた、塔の白い壁が印象的だった。